

### 第三話 「山形紅花まつり」に寄せる

昭和三十年七月十五日に、山形紅花振興会が主催となり、山形市中央公民館において、第三回の「山形紅花まつり」が行われました。その第一回は昭和二十六年七月に山形市で第二回は同二十九年七月十八日に、現在僅かに産地として残っている出羽村の、中学校講堂で行ったのでした。この「山形紅花まつり」の趣旨につきましても、振興会長の鈴木清助氏が次のように述べられております。

#### 「山形紅花まつり」について

山形の特産紅花は、昔から染料、薬用、化粧品、食用、または観賞用として重用され、わが山形地方、特に山形市発展の一因となつたばかりでなく、今日もなお伊勢皇太神宮年料、並に宮中御料として、御用命を受けておりますが、戦時中衰微の状況にありました所、戦後、逐年世人の関心を深め、その栽培量も増加し、一昨年には、NHKが公募し、全国郷土の花には、本県の「郷土の花」として送定され、その声価が全国に喧伝されるに至りました。

本会は、紅花のかゝる史的的重要性に深く思いをいたし、その栽培と利用を奨励して、これを新時代の特産品として復興し、併せて、今や全国的芸能として定評ある紅花摘唄、紅花染唄、および紅花踊りを、山形独特の民謡、踊りとして弘報し、以て紅花の新生命を發揚し、本県の産業と観光の振興に寄与しようとするものであります。

今回、第三回山形紅花まつりを開催いたしました所以も、またこゝにあります。何卒皆様には本会の意のあるところを御賢察下さいまして、紅花の振興に何分の御協力を切に御願ひ致します。

昭和三十年七月十五日

山形紅花振興会

会長 鈴木清助

このような会長の要望でありますので、私モ何か一つ御協力申上げなければ、何だか義理がわるいような気が起きましたので、最上紅花に関する雑文を一つ草します。

一体、紅花というような、草木染に用いる原料は、我が国にも上代から色々研究もされ、その種類も多く産しましたが、近世になつて特に有名になつたものに、阿波の藍、丹波刈安、遠江の茜、武蔵の紫根、それに肩を並べて最上の紅花があつたのです。紅花そのものは、全国的な産物でありましたが、その産出量において、特にその品質の優れた處においては、どこの地方のものも、最上紅花には遙かに及ばなかつたのです。

天文三年（一七三八）の、平清水清氏所蔵文書によれば、「当所紅花の儀、百来隨一の出来に御座候て、御召類染め来り、直段宜敷く御座候」とあります。争夷、文政五年（一八二二）には、東根町後沢の太田幾右工門は、伏見宮家の姫宮が使用される調度品の染色原料として、紅の調度方を申渡されておるのであります。芭蕉翁が元録の昔尾花沢で行く末は誰が肌ふれん紅の花」という句を作りましたが、東北の辺地後沢の紅は、遂に宮中奥深いお姫様の肌に觸れた仕合せ者となつたのでした。

また、幕府関係で必要な紅花の調達は、御用商人として指定されていた京都の紅屋久左エ門という者に、一切をまかせられておりました。そのために、京都に集荷される全国の紅花の中から、幕府用として、最優秀品三十駄だけを、優先的に買取る特権を持っておりました。レかるに、享保寛保頃（一七三〇年代）から、京都の紅花回屋の間に、暴利をむさぼる悪らつな手段を講ずる者が生じ、最上地方の生産人や商人に、少なからぬ損害をかけるようになりましたので、谷地や墨河江の商人が中心となり、京都の紅花回屋との間に一大紛争を起し、遂にはその取引を停止し、新に大阪の商人に売渡すことにした。ゆゑ、久左エ門は、京都だけで、幕府に納入する品質のよい紅花三十駄を送ることが不可能に陥り、御用商人としての大切な責任を果たすということも出来なくなりました。そこで久左エ門は、天明五年（一七八五）に、改めて大阪に三軒の紅花回屋を設置して、それを新に公認して貰うことを其筋に上申しております。こういう争奪は何れも最上紅花の品質の優れていたことを物語るものであります。

最上地方の年産額は、普通千駄位を上下していた様であります。明治八年発行の「世益新聞」に、山形県内に毎年他地方から入って来る金は、平均して凡そ三十拾万両であるがその内訳は、紅花の収入として約拾万両、他の商法による収益として約拾万両、湯殿山参詣の道着の使用して行く金が約拾万両と報じております。当時の山形県というのは、大体今の村山地方でありますから、いわゆる最上紅花の収入が拾万両程あつた訳で、この収入は当時の米価から割り出して計算しますと、米で約十三万四千俵分に当ります。

この大量の紅花は、農家や仲買人の所で、花餅という粗製原料に造られるだけで、その

精製は総て京都の紅粉屋でなされたものでありますが、当時は既に分業的な経済機構になつていたとは言え、原料生産地で何故モウ少レ製品化が出来なかつたのかと、地方産業経済と残念に思われます。モツとも、当時の心ある人々の中には、この奥に気づいていた者もあつたらしく、例えば山形藩主水野家の文書等を見ますと、上万の商人と山形の商人とがよく相談の上、上方から数万反の白木綿を山形に相廻し、これを立派な花染に仕上げ、また上方に送つてその需要を満したならば、国の利益も莫大なものになるうと進言した者もありましたが、但レこれは不成功に終りました。大量の荷物を上せたり下したり、その運賃が予想以上に嵩むばかりでなレに、産業的には後進的であつたこの地方のことでありますから、積極性というか投機性というかに乏しく、また技術的にも経済的にも、算が立たなかつたものでありませう。また、花餅から本紅を作るその技術自体が、非常にむづかしく、手数がかゝるばかりでなく、染色と水質との特別な関係もあり、色の抽出に必要な「烏梅」というものが余り産出しないレ、企業化するための経済力も気迫も、素朴な最上農民の中には無かつたのでせう。しかも、封建時代の農民、特に産業文化の後れてゐる地方の農民は、長い間そのように消極的に訓練されて来たのでした。

花染というものは、藍染等の一般庶民性のあるものと異り、非常に高貴的であり、近世初頭から、地方農民の衣料としてこれを使用することは、固く禁止されていたものです。中世末期に出た「おあん物語」には「さて衣服もなく、我が十三の時、手作りの花染めの帷子一つあるより外はなし」とありますが、この貧乏な暮らしていたおあんが着ていたという手作りの花染の帷子は、本紅染のものではなく、黄気染のものであつたらうと思

います。長崎の百姓代弥右工門が書上げたもの、中に、「羽州にて紅木綿これ有り、是は前書にこれ有り候紅花の、黄氣を毛み取り候跡の水、黄水に相成申候この水の中にて、木綿を一日も手の休みこれ無き様に振り付け居り候へば、右の黄水木綿にしみ込み、自然と至ってよき紅染に相成り申候」とありますが、廃物利用の花染木綿の着用は構いませんでした。

そういう訣で、染料としての本紅は、その使用度需要量の多い京都、特に高貴な織物を織る西陣において用いられ、あの鮮麗な色合を特徴とする京染の染料となつたのです。

西陣機業は地方機業と違い、元來は將軍家や宮廷関係の人々、それに上級武士の奢侈的必需品、即ち「御用品」としての織物を対象とするものであり、その残余が仲買の手を通じて、富有な町人たちの需要に充てられたものであつて、飽くまでも都市的手工業として発達したものであります。享保頃の調べによりますと、当時既に七十余の機数を持ち、その染色法も驚く程発達を遂げており、またそれに伴う京染の技術も、寛永頃に出た「御所染」というものから、元禄頃に出た「友禪染」に至るまで、その向色々の新しい染色法が、着しい進歩を見せていたのですから、山形で花染を企てて見た所で、そういう歴史的な勢力には、及びもつかぬ事であつたに違いありません。

美しい花染を作るために、水質というものの影響をも充分に考える必要があつた様です。京都にとって最も不幸な出来事であつた應仁の乱に際し、一時は流離四散してしまつた西陣の織工たちが、其後京都の近くの白雲村という所に集り、その復興を計つたのですが、その地方の水質が、どうも練糸に適さなかつたので、白雲村を捨て、再び西陣の地

に帰り、今の隆盛の墓を作つたと伝えていますが、この白雲村の水質は、恐らく染色にも不適なものであつたらうと思われまゝ。昔から「京紅江戸紫」という言葉がありますが、花染には京都を流れている水が、特によい影響を与へたものでしょう。西陣の近くを流れる紙屋川は、その源を丹波の石成層の山中に発するのでありますが、この川の沿岸には、昔から製紙業、織物業、染色業等、水を必要とする産業が発達して来ました。「京都土産」という元治元年版（一八六四）の本に、「地染は水にもよるが……、烏丸通りと長春町小紅屋和泉掾、室町丸太町上中村屋善兵衛等、別けて宜敷き趣なり」とありますが、特に小紅屋の井戸は名水で、どんな旱天の時も絶えなかつたと言います。このことに就いては、享和頃（一八〇一）に出た橋本経亮の隨筆「橋窓自語」の中に、「烏丸上長者町北西角小紅屋という家の井戸は名水にて、むかしひでりの比ひら、この水を公家にめざれしことあり。その時速水といふ称号を給わり、世々つたへ称し云々」と紹介されております。

本紅の製造に際し、紅色を本当に美しく発色させるためには、酸液を不可欠のものとなりますが、これには長い経験から「烏梅」を使用することが最もよいとされています。烏梅というのは、未熟の梅の実を藁灰の燄の中に入れて乾燥させたもので、梅の実の原形は保つておりますが、その色は黒くなつておりますので、この名が生じたのでしょう。また烏梅の代りに、剝梅はくばいというものも使います。これはやはり未熟な梅の実の肉を剝いで、乾燥させたものです。これらを水に浸し、その溶けて出る酸液を用いるのですが、その酸度とか使用量とか、或は注ぐ時の遅速とかいうことが、鮮かに紅が発色するかどうかの別れ目になるのであります。昔からの秘伝と言われるものも、この辺にひそんでいるのでしょ

ラ。

この烏梅の原料としては、普通には大和の月ヶ瀬の梅が多く用いられたように言われておりますが、必ずしもそうではなく、正徳年間（一七一〇）に出版された「和漢三才図説」の説明には、「烏梅は備後三原に出るものを良しとす。山城の産これに次ぐじとあり、また文政三年（一八二〇）の「商人買物独案内」には、「備後三原烏梅向屋、瓦町一丁目角（註一大阪）、広屋五三郎」とあること等から察して、むしろ現在の広島県三原市附近から産出する烏梅が、品質の優れたものであつたようです。三原市の西野の梅林というのは、只今でも名所となっておりますが、これは当時の名残りの梅林と思われま

す。私たちは、京都の名物という点、その一つとして、必ず友禪染の大振袖に絵日傘をさしかけ、鴨川縁りを歩いてゐる京舞妓の姿を思い出します。そしてこの舞妓さんの唇には、笹色の小松紅を奇麗にさした、艶な姿であるに違ひありません。こういう美しい京都の風俗を育て上げてゐる所の、染色用、化粧用としての紅というものは、その原料を最上地方で生産し、鮮麗に発色するための烏梅を備後で作し、本紅の製造や染色という仕上げの仕事は京都が担当するといふ、各々が歴史的な経験と技術とを生かす、全国的な一連の作業によつて成り立っているといふことに注意しなければなりません。

只今では、東京に残る唯一の紅製造家であり、山形の方にも度々見られる羽田家に伝わる秘伝の中に、「紅の製造に先立つては、埃離沐浴して神鏡に向うべし」とか、或は「工場には、月事ある婦人は入るべからず」といふような項目を示しておりますが、それ程にこの技術といふものを神聖視してかゝらなければ、名人の満足する鮮紅は出なかつた

ものでしょう。先に言いましたように、烏梅一つの加減さえ、長い経験による勘でやつたのですから、雑念が入っていても狂いが生ずるのも無理はありません。私が紅花に興味を持ち、その研究をするに当って、物心共に御也話になつております。遊澤敬三先生が所蔵される、年代不明の「紅トリ法秘伝書」という書き本や、明暦四年（一六五八）に、江戸の版本屋六兵衛が版行した「萬圃書秘伝」の中に載せてある「くれないの使いようのこ」とし等を見ましても、文章等は奥に下手で、文脈もたどるとしく、如何にも幼稚極まるものです。それが、それだけにまた、科学というものを全く外に、経験一つで生きて来た技術者、いや素朴な名人の手記した秘伝書として、誠に尊いものであります。

紅花は明治十年頃を境として、支那産の紅や、アニリンのような科学染料に圧され、殆どその姿を消すのであります。御大礼とか式年祭とかいう、古法を守る皇室の諸行争の御用としては、この紅花からとつた本紅を用いましたので、山形の岩淵氏、出羽村の設楽清次郎氏、佐藤清蔵氏、櫻井忠兵衛氏、後藤文太郎氏、伊豆田清吉氏、半沢久治郎氏、渡辺哲弥氏、或は高嶺の岡崎氏等の献身的な努力によりまして、僅かに保存されて参りました。最近ではまた、志村の佐藤八兵衛氏等を中心とする「紅花栽培組合」の結成があり、その後盾としての「山形紅花振興会」等の努力によりまして、約一反五畝歩から三段歩位の栽培を見るようになった訳であります。時偶々、昨年（註一昭和廿九年）はNHKの計画による、郷土の花の選定に会し、紅花は山形県を代表する「郷土の花」として、全国に紹介されるに至りましたことは、皆様も既に御承知の通りであります。

由来、秘伝と言われるものは、尙事によらず、封建的な性格と、徒弟的な関係と、独修



的な経験とによって得られる所の、一つの期というものであり、それだけに科学性と発展性とを欠くものであります。最近、紅花が山形県の特異な文化財として、多くの人々から深い関心を寄せられ、その保存と振興のために、力が注がれている訳であります。特に出羽志村の方々による犠牲的な栽培を中心として、その本紅の製造のために、封建的な秘伝というものを、現代の科学の力で克服しようとして、はじめ氏や岩淵さんや市村先生たちが、その研究に没頭しておられます。また専向的には東京の資源科学研究所に和田水女史が当っておられます。これが成功の暁には、染料に化粧品に薬用に、或はまた食用として、最上紅花は新しい脚光を浴びて登場することでありませう。そして、「郷土の花」としての紅花が、單に過去の歴史を偲ぶ名花としておけでなしに、飽くまでも実質的な生産と結びつい乍時こそ、その真価を發揮することになるのでありませう。

紅花に關した民謡にしても踊りにしても、元來は生産という仕事の中から生れて来たものですから、そのものを最も正しく保存し、そして、鑑賞するためには、出来れば生産と結びつけて行きたいものです。そこにこそ確かな強さを持つ生命が生れて来るものと信じます。